The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	帝国の政治思想
Author(s)	平野, 敬和
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44131
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【11】

氏　　名	平野敬和（ひらの ゆきかず）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　17453　号
学位授与年月日	平成15年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	**帝国の政治思想**
論文審査委員	（主査） 教　授　杉原　　達 （副査） 教　授　中村　生雄　　助教授　冨山　一郎

論文内容の要旨

本研究は、日露戦争とりわけ第1次世界大戦以後、総力戦体制を経て、戦後意識が形成される時期に至る20世紀前半期日本の政治思想の分析を課題としている。「序章＜帝国の政治思想＞という視座について」において、上記課題が、通史的概観として叙述されるのではなく、帝国に関する言説や学知は、世界戦争を契機に植民地という外部からの抵抗によって絶えず内部が形成・再編されるという過程で思想的な展開を見る点に焦点をあわせて分析されるべきものであることが提示される。この観点は、日本政治思想史研究における丸山真男の分析方法に対して批判的視座に立つものに他ならない。

「第1章　日露戦争期の立憲主義と帝国主義論」では、吉野作造が、日露戦争による高揚を民族の自覚に関わらせて論じたことを確認するとともに、君権主義と人民主権主義の両面批判の中から、国家の統治原理とその運用方法を主題とする政治学の領域を確定したことを説く。「第2章　帝国改造の政治思想－世界戦争期の吉野作造－」によれば、この時期、吉野は民本主義を主張するとともに、植民地統治を批判する多くの論説を発表するが、重要なことは、日露戦争期には対西欧の点で民族を発見した吉野が、第1次世界大戦以降1920年代前半にはアジアからの抵抗に直面し、帝国内部に抱えた抵抗者をも包含する帝国論の再構築を引き受けようとした点である。そして政治学に即してみれば、伝統的国家学と絶対的無政府主義を両面批判し、社会の領域を組み込み国家的価値の相対化をはかることによって政治学の革新を図ったところにその特徴があった。「第3章　「帝国主義」より「国際民主主義」へ－吉野作造の東アジア改造論－」では、吉野の中国論が集中的に取り上げられる。徳富蘇峰、大隈重信、浮田和民、内藤湖南らの中国論に対して、吉野は、南方革命派支持の立場から、帝国日本批判の回路を切り開いた。しかしワシントン体制確立後、条約で保護された日本の特殊権益の保護と中国革命運動との連携という両立の困難な課題に直面する。とりわけ北伐完了をもって国民革命の終了とみた吉野は、満蒙権益擁護に傾き、同時代的緊張感を失うに至った。

「第4章　「近代政治学」より「国際民主主義」へ－蠟山政道における＜統治＞の問題－」では、蠟山が行政学・国際政治学という新しい学問的領域を構築した思想情況を考察する。蠟山は、吉野の提起した問題を継承し乗り越える形で、帝国の社会領域への統治の問題を分析の主題にすえたところに独自性を有した。だがそれは、ナショナリズムを超越した相互性をもつ地域開発の論理の提起となった。かくして「満州国」が正当化され、さらに「東亜協同体論」への転回がみられたのである。「第5章　総力戦体制期の政治思想－戦中・戦後の蠟山政道と丸山真男－」は、当該期の二人のテキスト分析を通じて、戦時動員体制の形成を契機とする社会関係や思考方法の変革が、帝国解体後

も認識枠組みを規定したことを明らかにする。蠟山の「東亜協同体論」にみられた「現代化」すなわち近代の超克への関心とそれへの対抗を意識した丸山の議論の検討を通じて、実は戦時期に帝国の学知の中枢にいた両者の発話の位置の戦後への継続を指摘する。

「終章　むすび」では、本論文を概括するとともに、以後の思想的展開について若干の展望を試みている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、当該期日本の政治思想史研究に対して、独自の視角に立って、密度の濃い文体による緻密なテキスト分析を通じて、新たな問題提起と貢献をおこなうものである。それは、第一に、丸山真男の強い影響下で形成された思想史研究に関する先行研究を相対化しながら、帝国の問題が浮上する具体的な場面に焦点をあてて、吉野作造、蠟山政道、丸山真男を軸に、その周辺の知識人をも視野に入れつつ、日本政治思想史を問題索出的（heuristisch）に位置づけようとする試みである。そして第二に、帝国の解体により植民地帝国の「帝国臣民」から日本本土の「日本国民」へと転換する中で、丸山が「国民主義」を立ち上げた文脈を確かめ、そこから思想史研究の方法が形成されたことを剔抉する作業である。本論文は、植民地帝国の遺制が戦後の思想情況をいかに規定したのかという問題意識から、総力戦体制下の言説分析にとどまらず、第１次世界大戦期に立ち返って、世界戦争による構造変動によって植民地問題が前面に登場するとともに、政治に関する学知が揺さぶられ新たな規定を要求された姿を具体的に分析したものであり、その成果は、従来の思想史研究を批判的に乗り越え、独自性を示す内容となっている。

とはいえ、帝国の内部で帝国をめぐって語られたテキストを、帝国の歴史的過程と密接に関連づけながらダイナミックに読み解く作業としては、なお一層深めるべき余地がある。また帝国を内部と外部という対概念で論じる視角は、一方で論理の明晰さにつながるが、他方では両者の区分が曖昧化されるところに帝国の特徴が際立つともいえるのであり、その視角の設定は意義と限界をもつ。さらに戦後日本の自己像の形成という思想史的課題については、末尾で問題の端緒を示すにとどまっている。

だがこうした諸問題は、いずれも、本論文が開いた地平に基づいた上で今後の研究課題として改めて再設定されるべきものである。よって、これを博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。